

中学部 2 年、川本愛子さんが、第 69 回青少年読書感想文全国コンクールで「毎日新聞社賞」を受賞しました。このコンクールには、全国の小・中・高等学校や海外の学校で学ぶ児童・生徒から 265 万 4235 編の応募があったそうです。2 月 2 日に表彰式が日本で行われ、川本さんは招待されました。

以下に、川本さんの感想文と表彰式に参加してのコメントを掲載します。

### ■ 「シーラが私に教えてくれたこと」

「絶対“なんて言葉が付く才能なら、どんなものだって、のどから手が出るくらいほしいって、わかる？」

この本は、シャイなシーラが主役の代役という立場を経て、舞台当日のハプニングにより主役として演劇を成功させる物語です。演劇の練習の中で、シーラに絶対音感があることが分かり、周りが騒ぎ立てますが、恥ずかしがり屋で、なるべく目立たずに過ごしたいシーラにとっては、秘密兵器だの、本当の主役であるモニカにはない武器だのと言われることを嫌だと感じてしまいます。それこそ、絶対音感なんて欲しくて持っているわけではないと、それすらも否定してしまうほどでした。

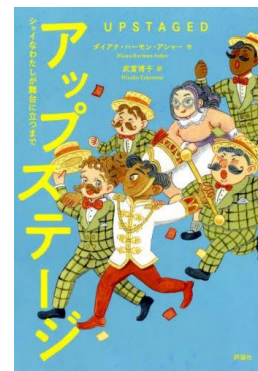
シーラの安定した歌声は確かに彼女が自信を持っていい魅力の一つだとは思いますが、私が感じた彼女の一番の武器は、演劇の成功という目標に向かって努力をおこたらないこと、周りが見ていなくても、決めたことをやり遂げる真面目さだと思いました。シーラはその真面目でシャイな性格である自分を良くは思っていないのですが、私は彼女のおとなしくてひたむきな性格が、周りにいる友人たちや先生方、劇にかかわった人たちの信頼を得ることができたのではないかなと思いました。

私はシーラと同じ年齢でアメリカの学校に通っているのですが、彼女の出会う、モニカやメリンダのように自信に満ちあふれている友人たちのことも簡単に想像ができました。

「ほかの人がどう考えているなんて気にしない。これが私なんだから。」と、全身で自分を表現できる人たちは、私も堂々としていてすごいな、と思う反面、自分がもしそのように振るまったら、周りからはどう見えるのだろうかということを考えずにはいられません。きっと、自分の思うように振るまったときに周りから受け入れてもらえなかったらとても傷つくと思うからです。

だから、演劇という役を通して自分を表現するのは、シャイであるシーラやポールにとっては得意なことになるのかなと思いました。

そして面白いと感じたのは、その役柄が物語にどのような影響を与えるのか考え、自分がその人物だったらどんなふうセリフを言うだろうと何十回も練習することが、結果的にはその役ではない本当の自分とも向き合うことにつながっているということです。私がマリアンなら、こんなふう言うだろう、とか、私はマリアンじゃないからこんなことはできないとか、自分と役の関係を通して、シーラが本当の私はどんなふう考えているのかを見つめている様子が伝わってきました。違う自分になりきることで、本当の自分を客観的に見ることができるのか



など思いました。

本当の自分とは何者なんだろう。という疑問も私自身も考えたことがあります。シーラが、殻を破りたい、誰かに本当の私を見つけてほしい、何かきっかけさえあれば変われる気がする、と、自分の中でかっ藤している姿に私もとても共感しました。自分の内側にいるもう一人の自分が、現実とは違う、自信に満ちて、物語の主人公のような人生を送れるんじゃないかと思わせるのです。

そんなシーラがステージに立った時に、「ここが私のたどり着きたかった場所なんだ。そして今の私になりたかった自分なんだ。」と、自分の居場所を見つけて、認めてあげた場面はとても感動しました。なりたい自分になるために、きっかけが欲しかったり、誰かに見つけてほしかったりと他力本願であったシーラが、演劇を通して、自分の本当の性格や考え方を認めてあげることができたシーンだと思いました。

絶対音感を認めてもらいながらも、そんな自分を受け入れられないシーラのように、人から認めてもらうことは嬉しいですが、それだけでは自分の自信にはならないと思います。自分自身を認めてあげることができたとき、それまでのできなかった自分や失敗した経験が自信になるのだと思います。そして自分を認めてあげるには、自分にうそをつかないことや自分がやると決めたこともやることなど、自分との約束を守れることが大事だと思います。シーラが自分を認めてあげられたのは、自分にできる努力をおこたらなかったことが自信につながったからだと思うのです。

美人で社交的なモニカやスポーツ万能なドルーのように、誰もがすぐに見て分かるような魅力や特技を持つ人たちもいる一方で、シーラやポールのように、普段は目立たないけれど、人目につかないところで努力ができ、周りがどう思うかを考えられる人であることも人としての大事な魅力の一つだと思います。シーラや私のように、そういう人たちは自分自身の居場所を見つけるまでに、他の人よりは時間がかかるのかもしれませんが、どこかにここが自分の居場所なんだと感じられる場所があると思うので、自分の自信につながるような努力を、これからも続けていきたいと思いました。

## ■授賞式に参加して

今回、私は東京で開かれた読書感想文全国コンクール受賞式に出席させてもらいました。会場には小学生から高校生までの受賞者と学校の先生や保護者、そしてコンクールに関わっている関係者の方々が参加されていました。

関係者の方として、課題図書 of 著者の方々や出版社のみなさんが来てくれて、直接私たちにお祝いの言葉をかけてくれました。私は自分の読んだ本の著者であるダイアナ・ハーモン・アシャさんと直接お話ししてもらい、この物語が彼女自身の小学生時代の演劇経験がアイデアの元であったこと、脇役で悔しかった気持ちをばねに、高校の時は演劇で主役になれたこと等、本には書かれていない裏話を気さくに話してくれました。私もサマーキャンプで演劇をした時の気持ちやミドルスクールからアメリカに来て大変だったことなどを話しました。物語の著者の方と話すことができたのは初めての経験だったので、とても嬉しかったです。

本で読むだけでなく、アメリカでの経験があるからこそ理解できるようになったことも多いと思っています。補習校のおかげでアメリカでも日本語の本を沢山読むことができ、この様にコンクールにも参加させてもらうことができ、セントラルケンタッキー日本人補習校の先生方に大変感謝しています。どうもありがとうございました。

